

第6回8020 童話賞
一般の部 「最優秀賞」 作品

「駿河の磯五郎地蔵」

「バアバチャン、お誕生日おめでとう。幾つになったの？」

「亜子さん有り難う。もう80歳なの。」

「元気なバアバチャン大好き。どうしてもいつも元気でいられるの？」

「磯五郎地蔵さんのおかげかな。」

「お地蔵さんが元気をくれるの？」

「磯五郎地蔵さんは歯を守ってくれているのよ。実はね、昔ね磯五郎さんという人がいたの……」

大晦日の夜酔っぱらった磯五郎さんがぶつぶつ言いながら歩いていきます。

「ああ〜！やつきり^①こいだ。俺の人生はなんておぞい^②んだ。今日だって大将のやつ俺の右手がないのを知ってるくせに重い魚の箱運ばせてよ、箱を落としたら『気をつけろ！箱だ^③って商品だ！』はだ^④ってじゃないんだぜ、

からい^④なんだぜ。それで喧嘩になって仕事を辞めさせられた。あく死にたい、死にたい。」
こんなこと言ってます。その時何かにつまずいて転んでしまいました。

「痛え。なんじゃこれ？」

よく見ると石の地蔵さんのようです。

「汚いけど洗えば売れるかもな？」

左手でよいしょと抱えあげました。小屋に持って帰ると荒縄を丸め水を付けてごしごしこすり始めました。黒い汚れが取れ始めると真っ白な石の地蔵が見えてきました。

「あれ！こいつ俺と一緒に右手が無いや。」

磯五郎さんもかわいそうに生まれつき右手がなかったのです。さらにこすると顔が現れました。にやっと笑っていますが前歯が折れていました。磯五郎さんは久しぶりににやっと笑いました。

「こりやおえん^⑤。売れないや。」

そう言いながら部屋のくろ^⑥に地蔵さんを置いて寝てしまいました。夜中誰かが見ている気配がして磯五郎さんは目を覚ました。さっきの地蔵さんが磯五郎さんの顔を覗き込んでいました。

「なんださっきの地蔵か。何か用か。」

「歯を拾って磨いてくれた礼を言おうと思っ
てな。ありがとうよ磯五郎。」

「わかったよ。うるさいな。かいだるい^⑦から俺は寝るぞ。」

「ちょっと待て。さっき死にたいと言ったのはなんじゃ。俺は歯抜け地蔵と言っ
てな、地蔵の世界ではちつとは名の知れた地蔵じゃ。力になれるかもしれんぞ。」

「うくん！実はな、俺はごらんの通り生まれつき右手が無いんだ。子供の頃からいじめられちよつと文句言ったらそれからずっとつまはじきさ。大人になってもろくな仕事がない。今日もその性で仕事を辞めさせられたんだ。俺はな、こんな身体に産んだ母ちゃんを恨んでいるんだ。」

「そうか、それは可哀想にな。右手を付けてやるわけにはいかないしな。そうじゃ、磯五郎、歯を磨いたことあるか？」

「歯を磨く？なんじゃそれ。」

「この枝の先をつぶしてな、塩を付けて歯を磨いてみる。この国一番の強い歯の持ち主になるぞ。」

「歯なんてどうでもいい。右手をくれ！」

そんなことを叫びながらまた眠ってしまいました。夜明けに起きた磯五郎さんは

「なんじゃ夢か？変な話じゃ。」

そう言いながら地藏さんを見るとその前に柳の枝が置いてありました。

「これで歯を磨くのか。」

磯五郎さんは海に出て枝の先をつぶし歯を磨き始めました。口の中が真っ赤になりました。

「ペッ、ペッ、かとうにねぢから血が出る。気持ち悪。」

ちやっ^⑩と海の水で口をゆすぎました。それから一週間歯を磨きました。するともう血も出無くなりました。

「歯を磨くと気持ちいいのう。飯もうまくなったみたいだ。」

さらに一週間歯を磨き続けました。すると磯五郎さんは無性に働きたくなりました。

「俺、仕事がしたい。親方に話をしよう。」

そう言いながら親方の所へ飛んでいきました。

「親方。俺を働かせてくりよう！頼むで！」

「だめじゃ、だめじゃ。お前みたいなの。」

「ぶしよ^⑫つたいやつ。帰れ！」

「それじゃあ働かせてくれるまでここで待つ。」

そう言って店の横に座り始めました。

「勝手にしろ。」

それから数日磯五郎さんは朝歯を磨いてから店に行き座っていました。

「磯五郎だめだぞ。箱をおやす^⑬やつなんて働かせられない。」

さらに何日か磯五郎さんが店の横で座っていると目の前で店の者が重い魚の入った箱を落としてしまいました。磯五郎さんは

「おい！箱だって商品だぞ。気をつける。」
そう言いながら箱に紐を結びつけました。そして左手を箱の下に入れ紐を啜えるとグツと力を入れました。魚の入った箱はスツと持ち

上がりました。それを見ていた親方が

「磯、すげえな、もう一度働いてみるか。」

「ありがとう親方。俺一生懸命働くで。」

次の日から磯五郎さんは朝歯を磨いてから店に行き一生懸命働き始めました。荷車を引くときにも紐を口に啜えて引っ張ります。しばらくすると重い物を運ぶ時には皆が磯五郎さんを頼りにするようになりました。

「みんなに頼りにされてうれしいんだ。」

磯五郎さんは笑顔でそう言いながら益々元気に働きました。あるとき親方が聞きました。

「磯五郎、どうしてそんなに元気なんだ。俺

最近身体がえらく^⑭てな。」

「俺歯を磨いてるんだ。そしたら飯もうまくなってるな、魚だって頭からまる^⑮さ^⑮ら食えるんだ。それから元気に働けるようになったんだ。

親方も歯を磨いてみろ。」

「そうか。歯を磨くのか。やってみるよ。」

親方が歯を磨き始めると元気が戻ってきました。それを聞いた村の人たちも歯を磨き始めました。そしてみんなが元気に働くようになりました。一年がたった大晦日磯五郎さんが寝ているとあの歯抜け地藏が現れました。

「磯五郎調子はどうじゃ？」

「地藏さんありがとう。俺丈夫な歯を使って一生懸命働いているぜ。右手が無くても何でもできるんだ。本当に感謝してるぜ。そしてこんな丈夫な身体に産んでくれた母ちゃんにも感謝してるんだ。」

「そうか良かったな。今までは自分のために働いてきたがこれからは皆のために働けよ。」

「そりやどういことだ？」

「お前はまだみる^⑯いのう。そのうち分かる。」

そう言って地藏さんは消えてしまいました。

磯五郎さんは元旦から働き始めました。

「磯五郎、庄屋さんの所へ魚を持って行ってくりよう。」

磯五郎さんが庄屋さんの所へ魚を運んで行く
と長老達が集まっています。

「最近村の皆さんお元気なことによろしい
な。」

「歯を磨くようになってから元気に働けるよ
うになったみたいじゃのう。庄屋さんも歯を
磨いたらどうじゃ。」

「そうか、残念わしはもう歯が無い。ハハハ
ハ。ところで今日の相談じゃが、村の舟が古
くて壊れそうなんじゃ。新しい舟を造るには
皆から寄付を集めにゃならん。」

「金のことは困ったのう。みんな貧しいから
なあ。」

それを聞いていた磯五郎さんが部屋に飛び込
んて言いました。

「庄屋さん、俺に寄付させてくれ。少ししか
ないけど。」

「村一番の貧乏なお前がか？でもありがとう
磯五郎。」

それを聞いた村の人達は感心しみんなが寄付
をしてくれました。そしてお金が集まり新し
い舟を造ることができました。8月の吉日村
に新しい舟が届き、村ではお祝いが開かれま
した。

「磯五郎ありがとう。お前が最初に寄付して
くれたので村の皆が協力してくれたんだ。あ
りがとう。」

「俺嬉しいんだ。村に協力できて。まだまだ
頑張るぜ。」

「酒飲んでくれ。」

「俺酒止めたんだ。餅を食わしてもらおうで。」
村人皆でお祝いをしました。その夜急に海が
荒れ始めました。風がビュウビュウ吹き始め
雨も降り出しました。村人はみんなお酒を飲
んで寝てしまったので気がつきませんでした。
磯五郎さんだけが海が荒れ始めたのに気がつ
きました。急いで海岸に行くと波が舟に襲い
かかっています。磯五郎さんは急いで舟が流
されないよう舳綱を左手でつかみ、さらにガ
シツと丈夫な歯で啣えました。海は益々荒れ

てきました。やっと嵐に気がついた村の人た
ちも海岸に駆寄ってきました。磯五郎さんが
一人で舳綱を掴んでいるのを見て叫びました。
「磯五郎危ない！止めろ、止めろ。」

磯五郎さんは思いました。
「俺舳綱は放さない。村の皆の舟だ。俺の舟
だ。」

その時ドカ〜んとすごく大きな波が磯五郎さ
んを襲いました。ゴ〜波が引きそれを境に海
は静まりました。幸い舟は浜に打ち上げられ
無事でした。しかし磯五郎さんの姿が見えま
せん。村人は

「磯五郎！磯五郎！」

と叫びながら一生懸命海辺を朝まで探しまし
た。しかし磯五郎さんは見つかりませんでした。
た。明るくなって新しい舟を片付けていると
舳綱に真っ白な前歯が刺さっていました。

「これは磯五郎の歯だ。あいつ死んでも綱を
放さなかったんだな。すごい奴だ。」

「もしかしたら小屋へ帰っているかも。行っ
てみざあ。」

村の人たちは小屋へ行きました。

「磯五郎！」

叫んでも返事はありません。小屋の中へ入っ
ても磯五郎さんはいませんでした。

「やっぱだめだったか。」

がっかりしながら部屋のくろを見ると真っ白
な石の地蔵さんが置いてありました。ニヤッ
と笑う顔は磯五郎さんにそっくりです。良く
見ると前歯がありません更に右手もありません
でした。

「この地蔵さん磯五郎に似ているぞ。磯五郎
が地蔵になって戻ってきたんだ。」

「そうだそうだ。磯五郎だ。」

皆が地蔵さんを見て泣き出しました。

「これからはこの地蔵さんに我々が元気で働
けるように歯を守ってもらおう。」

「そうだそうだ磯五郎地蔵だ。」

そして村の人たちは祠を建てて地蔵さんをお
祀りしました。

「亜子さん。こうして磯五郎地蔵さんは私達の歯を守ってくれるのよ。」

「そうだったの。判ったバアバちゃん。」

「私はね、毎日歯を磨いてね、地蔵さんに手を合わせているの。だから何でも食べられて元気でいられるのよ。」

「バアバちゃん。私も毎日歯を磨いてお地蔵さんに手を合わせる。それでね、バアバちゃんみたいな元気なおばあさんになる！」

【静岡の方言】

- ① やっきりこく：腹が立つ
- ② おぞい：ひどい 粗末な
- ③ はだって：わざと
- ④ がらい：うっかりと
- ⑤ おえん：困った
- ⑥ くろ：隅
- ⑦ かいだるい：疲れた
- ⑧ がとうに：すこく
- ⑨ ねち：歯茎
- ⑩ 飛んで：走って
- ⑪ ちゃっと：急いで
- ⑫ ぶしょったい：だらしない
- ⑬ おやす：壊す
- ⑭ えらい：疲れた
- ⑮ まるさら：全部
- ⑯ みるい：若い、未熟